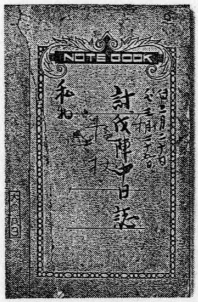
# 聯隊長の陣中日誌、その他

高橋新太郎　学習院女子短期大学教授

## 集書日誌

自分史とも重なるかたちで、昭和の戦後に至る思想・文化の流れを跡づけたいとの微志があって資料集めをしているが、その一環として、諸分野にわたる個人の日誌類を援用することを思い立った。数年前に西武新宿線新井薬師駅前の文林堂書店から、飛び飛びの不揃いではあるが、明治三七年から昭和三四年までの二五冊を入手した。同一人のものではなく、女性一人を含む三名の日記であった。体裁も、博文館の『当用日記』、希望社の『心の日記』、大東出版社の『仏教日誌』、第一書房の豪華装本の『自由日記』、丹流社の『原稿日記』等、まちまちである。昨年、いわき市の平読書クラブの『古書速報』で『文芸日記』を含む昭和十年代の日記数冊を得た。今年に入って江戸川の青田庄英さんから、岸信介商工大臣時代の某局長の戦後に至る日記と覚書を譲り受けた。そして最近、中支で混成旅団の輜重聯隊長をつとめた某氏の『備忘録』と私用の『陣中日誌』ならびに憂々生を名乗る戦後の『閑居誌』など一八冊を得た。主婦や勤労女性等、いわゆる銃後の女性達の日記類も幅広く集めたいが、まだまだ時間と根気を必要とするのだろう。それにしても、国をはじめ、地方自治体の公文書館は整備されてきたが、一私人の日記類をも含めた、時代の風霜に埋もれがちな民衆の私文書を保存収集する機関は出来ぬものか、と切に思う。




前記聯隊長の『日誌』によれば、昭和一四年三月、旅団の討伐行に輜重聯隊から参加したS准尉以下二二名全員が未帰還、全滅する。『日誌』は今回の作戦の意義そのものに疑義を提出し、〈カヽル討伐作戦ニ掛ケ代ヘノナイ部下ノ生霊ヲ失ツテ、真ニ憤慨ニ堪ヘサルナリ〉と記し、直接〈参謀ヨリ状況ヲ聴取シテ慨嘆〉してもいる。また、このS隊の件で旅団参謀部に赴いた折、憲兵の訪問を受け、参謀部に出入する〈二・二六事件関与ノ人員〉将校らの動静や〈右翼系ノ人員トノ交友〉その他について質問を受けている。二・二六関与者の、戦地での動向にまで、いかに神経を尖らせていたかが窺え、興深い。『碧巌録』を愛読し、『世界大戦回顧録』をひもとく、この武断派ならざる聯隊長某氏は、翌年五月、突然近衛輜重隊長（左遷？）を命ぜられ、〈愕然〉とする。内地へ帰還するが、着任の途中で、出迎えの副官から、〇大佐が、後任の隊長となる事を知らされる。結局、六月六日、戦時補充隊長を新たに命ぜられることとなる。敗戦後の元聯隊長某氏は開墾の日々を送る。〈米新聞ハ陛下ノ犯罪人指名に就テ論議セラレツヽアリ終戦時ノ御前会議ノ模様ナド仄聞セシコトヲ今日想起シテ転タ感慨無量、国体護持遂ニ成ラサルナリ〉。『閑居誌』昭和二〇年一二月七日の一節である。